

宮崎大学における初級中国語授業の学習意欲向上の試み

上原 徳子ⁱ 王 廣慧ⁱⁱ

An Attempt to Enhance Students' Motivation in a Beginner's Chinese Class: In the Case of University of Miyazaki

Noriko UEHARA Wang Guanghui

はじめに

宮崎大学における中国語教育の歴史も平成21年度をもって8年目を迎えた。これまでの宮崎大学の中国語教育の変遷と現状については、『宮崎大学教育文化学部紀要・教育科学・第21号(2009年9月)』掲載の論文ⁱⁱⁱ中で詳しく述べた。そこでは本学の中国語中級クラス及び初級中国語クラスの中国語検定受験者がどのような意識を持って学習に取り組んでいるのかを分析し、我々が今後どのような授業を目指すべきか、いくつかの提案をした。

本論文では、前年度の調査を踏まえ、平成21年度の初修外国語クラスの一部を対象に学習意識の調査及びその分析を行い、宮崎大学の学生の中国語学習意欲を向上させるにはどのような方法が最も効果的かを考察する。

本論文が調査対象としたのは平成21年度の初修外国語中国語のうち上原徳子担当の教育文化学部・工学部クラス及び王廣慧担当の教育文化学部・工学部クラスである。

なお本論文の一部は、平成21年9月11日に宮崎で行われた「第58回九州地区大学一般教育研究協議会」外国語部会において上原・王共同名義で発表したものである。また、第2章を王がそれ以外の部分は上原が執筆を担当した。

1 授業体制と調査対象クラスについて

今回対象としたクラスについて説明するために、まず平成21年度の中国語授業体制について簡単に述べたい。

現在宮崎大学では初級外国語は必修であり、週2回授業が行われる。中国語は、日本人教員と中国人教員がそれぞれ1回ずつ授業を担当することになっており、単位はそれぞれの授業で認定される。そして、学生には、特別な事情がある場合を除いて、基本的に日本人教員・中国人教員の授業それぞれで単位を取得するように指導している。

クラス数は、教育文化学部、農学部、工学部にそれぞれ2つずつある。医学部の学生が中国

語を履修したい場合は、もっとも都合がよい時間帯のクラスに入って受講する。

また、日本人教員と中国人教員は同じ教科書を使って授業をする。教員は互いに連絡を取り、それぞれの授業内容や宿題を把握しながら授業を進めることにしている。今年度は、日本人教員が文法を担当し、中国人教員が発音と会話練習を担当している。学生は教科書を担当教員ごとにそれぞれ買う必要がない。本年度使用の教科書は、守屋宏則・柴森著『これならわかる中国語・初級』（同学社）、関西大学中国語教材研究会編『キクタン中国語 入門編 中検準4級レベル』（アルク）の2冊である。

初修外国語の単位は通年で認定される（医学部を除く）。本年度中国人教員クラスの成績評価は学年末に以下の基準にしたがって行われる。平素の小テスト・レポート課題20%、授業期間中に1回行われる中間試験と大学の定める試験期間中に実施される定期試験（前後期計4回）80%、で計100%となる。一方日本人教員クラスの成績評価基準は、出席・授業態度10%、平素の小テスト・レポート課題30%、定期試験2回（前期20%、後期40%）60%の計100%である。また、中国語検定試験の結果は成績評価に加味される。

本論文で取り上げるのは、上原と王が担当する2クラスである。それぞれの組みあわせは以下の通りである。

1 教育文化学部2組クラス

火曜日 3-4限 王 木曜日 5-6限 上原

2 工学部1組クラス

月曜日 3-4限 上原 木曜日 3-4限 王

クラスを構成する一年生は、教育文化学部クラスが36名、工学部クラスが51名おり、上原・王は全く同じ学生を担当する。なお、この数には前期のみ履修する医学部看護学科の学生や過年度履修生は含まない。したがって実際にはもっと多くの学生が受講していることになる。また、過年度履修生については、それぞれの事情（専門の授業の時間割などの調整）に応じて受講クラスが決定されるので、二教員が同じ学生を担当するとは限らない。

以上のことをふまえ、平成21年度前期の上原・王の試みについて述べていきたい。

2 王によるアンケート調査結果の分析と考察

本章は、平成21年度前期に王が担当した教育文化学部クラスと工学部クラスについて、王の授業時間内に行ったアンケート3回分の分析結果とそれについての考察を述べる。

2.1 中国語の学習目標及び選択動機について

1回目アンケートは4月初めの授業（平成21年4月14日）中に行った。

表1は1回目アンケート中で行った「中国語を学習する目標」に関する質問についての集計結果である。その結果 「単位を取ればよい」を選択した学生数は全体の2割を超えず、8割以上の学生は単位取得のみならず、旅行や留学または仕事に役に立つことを意識、あるいは期待していることが分かった。よって、中国語を選択した学生の多くは、初期には中国語を学習する意欲が充分あることが判明した。

表1 一回目アンケート 中国語を学習する目標について

クラス名	一年間中国語を勉強する目標（複数選択可）			
	答えた人数	中検を受けたい	旅行、留学、仕事に役に立つ、その他	単位を取ればよい
工学部クラス	54	3	53	7
		87%		13%
教育文化学部クラス	43	13	35	8
		81%		19%

2.2 実践会話形式の試験実施による学習意欲向上について

2回目のアンケートは、ピンイン（アルファベットを用いた中国語の発音記号）の学習を終え会話文に入り、ある程度の挨拶・自己紹介を取り入れ、前期中間試験が終了した時点（6月2日）のデータである。その時点の目標を項目別で見ると、教育文化学部クラスも工学部クラスも「話せる」ことを目標とする人数は最も多く、それぞれ全体の67%と57%で全体の半分を占めた（図1）。

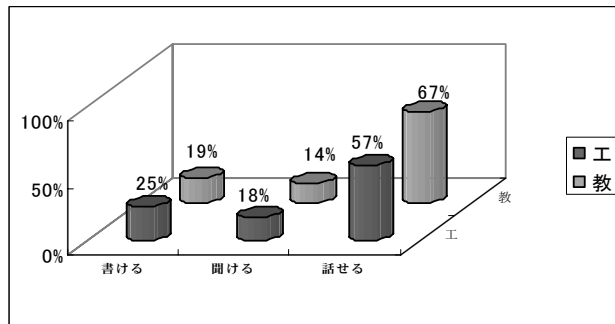


図1 中国語学習目標

ここまで、小テストの一部分と中間テストは実践会話形式で行なった。実践会話形式とは、テスト範囲を指定し、教員が中国語で質問をして学生はその質問を中国語で答えるというものである。聞くことと話すことの両方の力が問われる上に、限られた時間内で答えなければならない。よって、学生は十分な準備をしなければ対応できない。試験時には緊張と興奮の雰囲気にもまれる中、うまく答えられなかった学生もいたが、ほとんどの学生はよく準備していたことが明らかだった。

2回目のアンケートでは、学習を始めた当時と前期中間試験時点を比べての学習意欲の自己評価について調査した。意欲が「上がった」と答えた学生数は工学部クラスは60%、教育文化学部クラスは70%で、話すことについての意欲が伺える。全体的に2クラスともに学習意欲は向上したといえるだろう。その理由として考えられるのは、授業やテストが発音を中心と

した効果である。学習意欲が「上がった」と答えた学生の自由コメントに多くあげられたのは「楽しい」、「少し話せるようになった」、「発音が充実している」などがあつた。一方、学習意欲が「下がった」と答えた学生は、理由として、「難しい」「分からない」、「宿題が多い」、「好きじゃない」等を挙げていた(図2)。

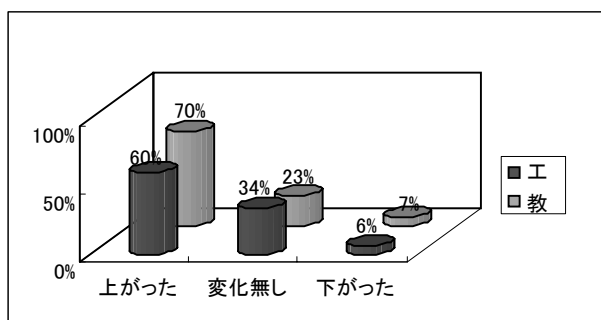


図2 2回目アンケート時点の学習意欲(クラス中の割合)

2.3 「話せる」目標の達成自信の自己判定について

2.3.1 中間時点の目標と期末時点の達成自己評価について

3回目アンケートは前期末試験時点(工学部7月23日・教育文化学部7月28日)に実施した。ちょうど学生にとって学習内容が難解になり、覚えることが増加し、伸び悩む時期である。2回目アンケート時点の目標と比べ、「今の自分にとって一番自信があるのは?」という質問について自己判定で答えたデータを見ると、目標と全く違う結果になったことが判明した(図3・図4)。

これは、学生が学習を始めてまだ半年であり、結論を出すにはまだ早いこともあるが、その原因は以下のいくつかの観点でまとめられるだろう。

1. 単語数や文法表現の急増につれて、それらを十分理解し覚えるために、学生は今まで以上の復習と予習する努力を必要とするが、事実上できていない学生が多数いる。
2. 会話中心の授業までに十分な準備ができていなければ、教科書上の会話文だけ暗記できても応用はできず、実際の会話はうまくいかない。授業は確認作業で時間を使い、会話練習時間が少なくなり、発音中心の授業がなり立たない。

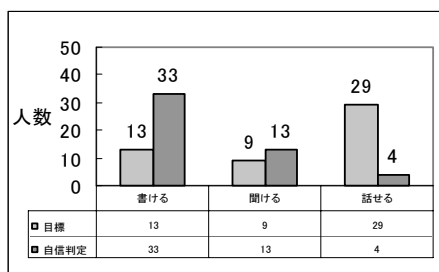


図3 工学部クラス中国語学習目標と自己判定 (単位:人)

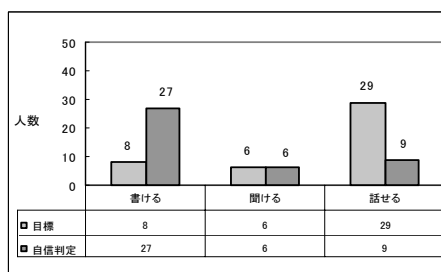


図4 教文クラス中国語学習目標及び自己判定 (単位:人)

3. 「書く」学習は、自主的にできる。しかし、ピンインは確実には身に付いておらず、教科書の中で音声教材がない部分の自主学習は事実上出来ない状態である。
4. 多人数クラスであるため、教員がこまめに学生全員の発音を確認することができず、大まかな問題点を指摘することしか出来ない。よって、学生は「話せる」と言えるまでになるのはなかなか難しい面があることも考えられる。もし発音の問題点をこまめに指導しなければ、その部分を分からないまま引きずっていき、学生は発音に自信がなく、やがて学習意欲を失ってしまうだろう。

2.4 教育文化学部クラスでの新しい試みの実施について

2.4.1 実施の理由

中国人教員（王）クラスでは前期の中間試験まで、工学部と教育文化学部両クラスともに同じ授業形式を実施していた。

それまでは、学生の予習、復習に対する学生の「やり方がわからない」、「どうすればいいかわからない」、「宿題範囲をはっきりして欲しい」などの声に応じて次のような予習宿題を課していた。それは、次の新しい課の単語や課文（教科書本文）の発音をCDで練習すると共に、形が見えるようにするため、宿題として紙に書いたものを提出するというものである。宿題とは、単語の漢字、ピンインと意味を調べて用紙に書いて提出するものと、課文の意味を教科書上に書き出し、授業時に読みと解説を指名発表させるというものであった。また、復習として終わった章の練習問題を紙に書いて提出させた。2クラスには前期中間まで明らかな違いが見られなかった。

前期後半は、教科書の課文一つ一つが長くなり、内容も難しくなって、学習意欲が落ちていく学生が続出する傾向がある。そこで、中国語の雰囲気作り、クラス全員に積極的に話す、学習意欲を保たせるなどの狙いで、教育文化学部クラスを対象に授業に新しい試みをした。試行対象に教育文化学部クラスを選択したのは、工学部クラスよりクラスの人数が少なく、会話練習が実施しやすいからである。

2.4.2 具体的実施内容

宿題は自主的に行い、提出物は一切なし。

その代わりに毎回授業前にグループ発表を実施する。

グループ発表は採点され、グループのメンバー全員は同じ得点である。

発表内容は毎回授業した内容に基づいて決め、次回の各班での発表となる。

発表はすべて中国語で行い、教員が文章を聞き取れた数で採点する。

2.4.3 学生の反応

以上の試みを実践した後、実践会話発表について学生たちの感想を尋ねた（表2）。「良いと思うところ」について学生43人中39人が記入していた。その中で多くあげられたのは「発音・日常会話・話す能力・自然に覚えられる、楽しめる」などであった。これは教員の狙い通りの結果であった。「良くないと思うところ」については19人が回答した。その結果、学生が「良くない」と思うのが練習、準備時間にあることが分かった。

授業進捗の関係で、授業中にグループに与えられる発表への準備、練習のための時間は10分

表2 三回目アンケート グループ発表について

(単位：人)

良いと思うところ	回答者 39人	良くないと思うところ	回答者 21人
発音・日常会話・話す能力・自然に覚えられる	9	練習時間が少ない・練習できない・準備が大変・覚えきれない・忙しい	8
楽しい・楽しめる	7	時間がかかる・時間が足りない	2
協力して・チームワーク・アイデア	7	準備してきた人も意味がなくなるときもある	1
するようになる・やる気がでる・積極的な・自主的になれる	6	前もって範囲の指定がないときがある	1
実践的である・実践すると覚えやすい	3	成績に繋がること	1
いい刺激になる・厳しさが増す	2	何もしない人がいる	1
一人ではできないこともできる	2	時間の無駄	1
全部	1	自分のせいで迷惑をかける	1
自分の発音を確かめられる	1	休むと大変	1
度胸がつく	1	恥ずかしい	1
友達ができる	1	私語が多くなる	1

にも満たない。よく出来たグループは、時間を効率的に使うため、発音の練習は各自で行なう。また、打ち合わせは授業前に早めに教室でしていた。しかし、それができなかったグループもあった。グループ実践会話発表の取り組みは、まだまだ改善すべきところがあるが、数字、コメントから見ると、結果的に、話すようにさせる、やる気を出させる、中国語環境づくりを行うという意味では効果的だったといえるだろう。

2.4.4 教育文化学部クラスの新しい試み実施後の工学部クラスとの比較

最後に、実践会話練習を行ったクラスとそうでなかったクラスの比較を行うために、両クラスに同じ質問をして比較してみた。尋ねたのは、自分は現段階で中国語のどの能力に自信があるか、である。

図5によると、両クラスともに自己評価が高いのは「書ける」>「聞ける」>「話せる」の順であるが、「話せる」の項目に注目すると、教育文化学部クラスが21%であるのに対して、工学部クラスは8%であった。両者に明確な差があるといえる。

他に、図6、図7から両クラスについて、教育文化学部クラスは前回アンケートと比べ学習意欲が「下がった」者は7%増加したのに対し工学部クラスは14%増加した。また、学習意欲が上がった学生の割合でも教育文化学部クラスは35%だったのに対し工学部クラスは22%であることも判明した。これは単に教育文化学部クラスには文系の学生を含むからではなく、新しい取り組みの効果だったといえるだろう。

以上の結論として、授業中に中国語で積極的に話す機会を増やしていくのは重要であることがわかった。学生も、教師も「話せる」授業にしたいという目標が一致しているなか、特に工学部クラスのように50名を越える多人数クラスが学生の要望に応える授業を行うのには適して

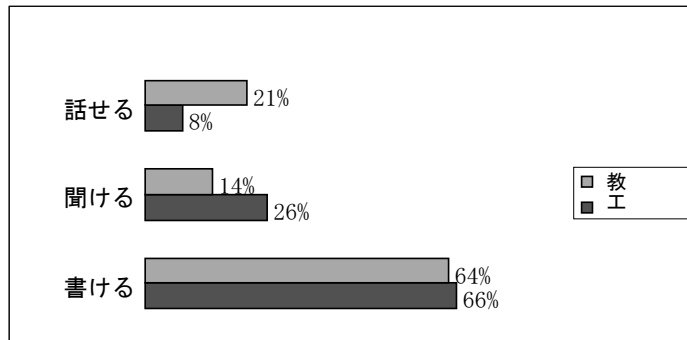


図5 工学部クラスと教文クラス自信に関する自己評価比較

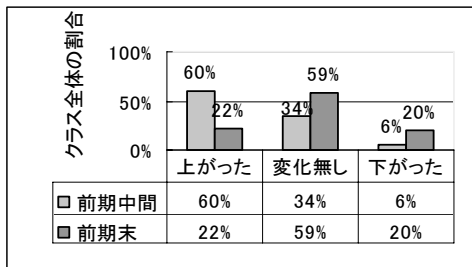


図6 工学部クラス前期中間と期末時点の勉強意欲変化

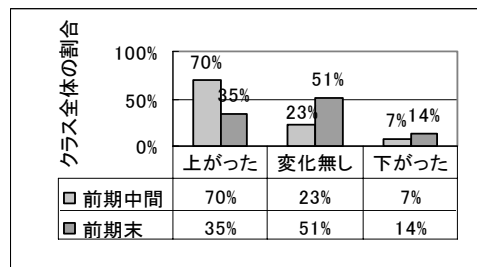


図7 教文クラス前期中間と期末時点の勉強意欲変化

いないのは明らかであろう。今後クラス編成をする際、この報告が一つの参考になれば幸いである。

3 出席カード使用と学習意欲の関係

これ以降は、上原クラスで行った調査と報告である。

中国語の授業では平成20年度より全クラスにおいて出席カードを採用している。カードはB6サイズの情報カードに必要事項を印刷したもの（資料1）で、毎時間学生に配布し、授業終了までに教員が回収している。

導入の目的は、学生自身の自己の出欠状況と小テストの点数の把握と確認、及び教員と学生とのコミュニケーション手段の確保であった。近年、自身の欠席回数すら把握できない学生が増加した。したがって、カードを毎回学生に見せることにより、安易な欠席を防止できると考えた。また、厳正な成績管理と情報開示のため教員側の記録の正確さが求められることから、双方が毎回記録を確認することにより教員の心理的負担を軽減する目的があった。

3.1 学生が感じた出席カードの効果

出席カードがもたらす効果について前期末試験時に学生に尋ねた。(教育文化学部クラス7月23日・工学部クラス7月27日) なお回答数は、教育文化学部クラス39名、工学部クラス51名である。

その結果は表3の通りであった。

表3 出席カードの有効性について (数字は%)

	有効	まあまあ有効	有効ではない
教育文化学部	51.3	46.2	0.2
工 学 部	12.0	84.0	0.6

2つのクラスで割合に差はあるものの、学生のほとんどがカードの有効性を認めている。さらに学生に具体的な感想を書いてもらったところ、毎回自分の出席状況の把握ができることと、授業の進度を確認できることに有効性を認めた意見がほとんどであった。中には出席意欲がわいたと述べる者もあり、ただ出欠を確認するだけではない波及効果もあることがうかがえる。

以上のことから、今後も中国語全クラスにおいてカードの使用を続けることが望ましいと思われる。今回は上原担当の2クラスのみでの調査だったため、いずれ導入している全クラスでの調査を行い、効用を明らかにしたい。

3.2 セルフチェックシートの活用と効果

セルフチェックシートは、上原担当のクラスにのみ導入しているもので、出席カードの裏に印刷をしている(資料2)。

これは、大阪府立大学の清原文代氏の行っている「自律学習のための試み^{iv}」を参考に今年度より導入した。

上原担当中国語クラスではシートを次のように使用している。

授業の最後に出席カードを配布し、学生に今日の授業での達成目標を提示する。例えば、「形容詞の使い方がわかった」と黒板に書く、あるいは口頭で伝える。次に、学生には自分が1から4のうちどの段階にあるのかを自分で評価させる。そして、自由記述欄に、質問や感想を必ず書かせる。

さらに、学期の始めに、学生自身で今学期の目標を書かせ、学期の終わりにはそれに対する自分の評価を書かせるようにした。学生には、これは成績評価には全く関係がないこと、自分で自分の学習状況を律していくためのものであることを明確に伝えてある。

清原氏は、セルフチェックシートは学生の役に立っているという印象をもっておられるようだ。上原担当クラスの学生のうち、今回アンケートをとった2クラスの学生も、出席カードの効果についての自由記述欄で、毎回自己評価することにより自分自身で理解度を測れる、反省ができると感じている者が多数見られた。その日の新出文法項目が自分にとって少し難しかった、あるいは集中力を欠いていたために理解ができなかった場合、それを素直に評価・反省することができ、次への意識付けができるようである。教員側も、学生が全体的に難解だと感じた項目については、次週にさらに説明を加えたり、中国人教員の授業中にその文法項目につい

て説明をして欲しいことを連絡し、すぐに手当ができるというメリットがある。また、セルフチェックシートの自由記述欄は学生とのコミュニケーションの手段としても使うことができた。

今後、毎時間の到達目標を授業の始めに提示して、学生に意識付けした上で授業を受けてもらうなど、より効果的に使用できるようさらなる工夫を行いたい。

4 学生の授業に対する意識

4.1 予習と復習への意識

筆者は、はじめに述べた前論文²⁾において、宮崎大学の学生は中国語検定への準備をほとんど行っていないという事実を明らかにした。しかし、検定のためではなく、初級中国語授業のための準備についての調査は実施できていなかったため、今回アンケート内で、本年度新入生の意識を調査することとした。

まず、上原クラス第1回アンケート（工学部6月1日・教育文化学部6月4日）において中国語に限らず語学の授業で予習復習は必要だと思うかどうかを質問した（表4）。その結果、2クラス共に半分以上の学生が予習・復習どちらも必要であると感じていたことがわかった。

表4 語学の授業に予習・復習は必要だと思いますか？

(数字は%・回答数 教育文化学部39・工学部58)

	教育文化学部	工 学 部
どちらも必要	73.4	53.4
予習は必要	5.1	10.3
復習は必要	10.2	10.3
どちらも不必要	2.6	-
その他	-	0.2
未回答	7.7	24.1

さらに、上原担当の中国語の授業について予習復習をしているかの質問に対しては、予習をしている学生が教育文化学部で9割近く、工学部でも7割いることがわかった。復習は両クラス共に半数を越えている（表5）。

予習の内容についても尋ねたところ、学生のほとんどは授業の始めにほぼ毎回行っていた小テストの準備に時間を費やしていた。また、復習を行う者は、その日のノートの整理を行っていた。

表5 予習復習をしていますか？（数字は%・回答数 教育文化学部39・工学部58）

教育文化学部		工 学 部	
予習している	予習していない	予習している	予習していない
87.2	12.8	70.7	10.3
復習している	復習していない	復習している	復習していない
51.3	48.7	55.2	25.9

学生の多くは、予習復習の重要性を認識している。他にも多くの講義を受講しなければならない1年生に、中国語のために多くの時間をさかせることは難しいが、一年間で中国語の基礎を習得するために必要な最低限度の時間を授業以外でもとらせるための工夫は教員にとって不可欠であろう。

この結果をうけて、6月のアンケートから約2ヶ月が経過した期末テスト時にもう一度アンケートを行い、自分のこの授業への取り組みについてどのように感じているのかを尋ねた。

表6 自分の授業への取り組みはどうでしたか？(数字は%)

	十分	普通	不足
教育文化学部クラス	33.3	59.0	0.8
工学部クラス	11.8	82.4	0.6

表7 今回の試験をどう感じましたか？(数字は%)

	難	普通	易
教育文化学部クラス	87.2	0.8	0.5
工学部クラス(45人が回答)	15.7	72.5	0

学生の思う「普通」がどのような状況を指すのか明確ではないが、6月のアンケート時の予習・復習をしているかどうか尋ねた結果を前提に考えると、予習・復習をして授業にのぞむことができているれば、彼らの感覚として「普通」以上の取り組みができたと感じているのではないかと推測できる。

4.2 学生の二教員による連携授業への評価

予習復習に関連して、二教員による連携授業がうまく機能しているかどうか検証した。今回、上原・王のペアクラスでは、王の時間に出した宿題を上原の時間で回収するなどの試みをしたが、うまくいかなかった。学生がきちんと話を聞いていない(彼らからすれば教員がはっきり言わなかったということのようだが)ため、火曜日の授業の宿題はあくまでも火曜日の提出だという思い込みを崩すことができなかったのである。そこで、我々はそのような宿題回収方法を途中で放棄することにした。

過年度履修の再受講学生がいるため、教員が完全に同じ学生を担当できないという問題点もあり、2教員が何か連携して授業するのは非常に難しいことがわかった。ただ1冊の教科書を共有するだけではペアでの授業の意味がないと考えたため、上原担当クラスでは新出文法事項の説明が主な内容ではあるが、王クラスでの会話実践形式の授業形態を意識して以下のような取り組みを行った。

1. 教育文化学部クラス

- ・平均4人からなるグループを作った。
- ・グループ対抗ゲーム(単語の伝言ゲーム等)を頻繁に行った。
- ・個人戦(反対の形容詞がすぐに言えるかどうか等)など、新出単語の語彙取得を中心に競

わせる形のゲームを行った。

- ・一時間に個人で1～2度の発言があるように配慮した。
- ・王クラスと共通の名札を使用した。
- ・よくできた学生には教員だけでなく皆で賞賛する雰囲気をつくり、できなかった学生には皆が励ますような家族的雰囲気作りに配慮した。また、教員が学生またはグループを賞賛するときは「好カード」というカードを渡し、出席カードに貼り付けさせ、何枚もらえたかがはっきりわかるようにした。

2. 工学部クラス

- ・7～8人のグループを編成し、グループ内で音読練習するなどさせた。
- ・グループから代表者を選ばせる形での班対抗のゲームをした。
- ・教育文化学部よりも文法の理解に困難を感じる学生が多かったため、授業中板書するだけでなくプロジェクターに教科書や教員作成の文法説明のプリント（カラー）を映し出しながらの説明を心がけた。学生にもプリントを配布し、書き込ませながら授業を進めた。
- ・良い回答をしたり元気よく答えた学生やグループには「好カード」を渡し、出席カードに貼り付けさせ、何枚もらえたかがはっきりわかるようにした。

以上のような工夫を行い、7月に行ったアンケートで学習意欲の変化とこの授業の感想を学生に尋ねてみた。その結果は以下の通りである（表8）。

表8 前回アンケート時と比較し上原の授業への
学習意欲の変化はありましたか？

	教育文化学部 (回答数39)	工学部 (回答数51)
上がった	64.1	37.3
変化なし	37.3	58.8
下がった	0.0	0.4

その理由として次のようなものがあった。

教育文化学部クラス	工学部クラス
単語力がつく 楽しくなった 好カードが欲しい 楽しい 小テストのために頑張る 適度な厳しさ ゲーム形式のテストが面白かった グループでの取り組みが楽しい ゲームのおかげで上達する実感がわい 皆、仲が良い	楽しくて分かりやすい 分かるようになってきた 面白い 楽しい 話せるようになりたい

この結果から、教育文化学部クラスでは、グループ活動とゲーム形式の授業が学生の学習意欲を向上させ、工学部では彼らが理解しやすい解説を心がけプリントを多用したことにより授業の理解が進み、意欲が向上したことがわかる。工学部の学生は、他学部と比較すると中国語に対して自信が持てずすぐにあきらめてしまう傾向があるが、一歩ずつ理解を進め自信を持たせることによって、意欲も向上し、クラス全体がよい傾向に向かうことがわかった。

表9 上原の授業への満足度を教えてください。

	教育文化学部	工 学 部
満足	76.9	45.1
普通	20.5	54.9
不満	3.6	0.0

具体的理由は以下の通りであった。

教育文化学部クラス	工学部クラス
文法が分かりやすい 進度がちょうどいい 分かりやすい ゲームが楽しい 好カードできちんと評価される 楽しい 上達を感じた 説明が丁寧で発音の仕方も分かりやすい	楽しくて分かりやすい 分かるようになってきた

また、授業への満足度は、表9のとおりである。教育文化学部クラスで7割、工学部クラスでは4割の学生が満足だと回答している。

両学部の割合に差があるのは、王の報告にもあったように、教育文化学部クラスは工学部クラスより人数が少ないため、よりきめ細かな指導やグループ学習が可能であったからであろう。上原担当の工学部クラスもグループ活動を試みたが、グループ数が多くならないように、一班8人前後で組になってもらうしかなかった。これでは、やはり人数が多すぎてグループ活動がうまく機能しなかった。2クラスの構成人数の差が、満足度の違いの大きな要因になっているのは確かだろう。

4.3 学生自身が考える学習意欲向上の方法

最後に、7月末の前期末テスト時アンケートで学生自身が中国語をもっとがんばって勉強したいと思うようになるにはどんなきっかけが考えられるのかきいてみた。圧倒的多数意見は、

- 中国人（留学生）との直接の交流。
- 中国及び中国文化を身近に感じられた時。

というものであった。また、その他には、「好カード」がもらいたい時、将来の必要性を感じ

る時、テストで良い点数を取ろうとする時に学習意欲が増すという答えがあった。

王のアンケート結果からもわかるように宮崎大学の学生が中国語を選択する理由には、就職など将来への不安から来る中国語へのある種の打算だけでなく、もっと異文化と直接交流し理解したいという素直な欲求が根底にあるのだろう。そうであるならば、前論文で提起した検定受験中心を意識した授業のあり方が本学学生にはあまり適していないのではないかという疑問には、おのずと答えが出ているのかも知れない。

しかし、中国人留学生との交流といっても、それがキャンパス内で行われる限り日本人学生と中国人留学生は日本語で交流が可能であり、中国語を用いずとも相互理解を深めることはそんなに難しくない。学生達は、日本語が全くわからない中国人留学生の支援ができるほどの中国語を身につけたいわけではなく、言葉の能力とは無関係に、ただ漠然と中国というものに触れてみたいと思っているに過ぎないのではなからうか。現に、異文化交流体験学習に参加し、中国に行こうとする学生は毎年全学で10~20人である。多くの学生は、時間的・金銭的制約を抱えており、こちらがいくら機会を与えても、実際にその機会をいかせる学生は少ない。昨年度交換留学生たちとの交流の場を設けたが、実際にその場に来た学生はごくごくわずかであった。

ただし、筆者はだからといって、彼らの中国語を使ってみたい、文化交流をしてみたいという望みを否定しているのではない。中国語学習は、中国や中国文化に触れるための入り口である。その意味で、彼らに身につけた学習内容が実際に中国人にも聞き取ってもらえる、また中国人ネイティブの発音を1つでも聞き取れるという喜びを知ってもらうことは非常に重要である。それが学習意欲向上と密接に関連しているのは王の報告で明らかである。

実際は、中国人教員の授業時間が中国人と直接ふれあう唯一の時間である学生がほとんどである。王の指摘にもあったように、多人数のクラスでは十分な会話練習まで行うことは不可能であるが、我々は困難な状況の中でも工夫をし、少しでも学生達が満足感を得られるような授業を提供しなくてはならないだろう。そして、その満足感が彼らが能動的に留学生と交流する、あるいは異文化交流体験に参加する、あるいは交換留学生として中国に長期留学するという行動に結びついてくれれば、教員側としてもよりやりがいを感じることができる。

学生が、中国語学習により一層の満足を感じるためには、達成感が必要である。しかし、それが検定試験という明確な目標を基準とするのか、「話せる」「聴ける」という極めて主観的なものさしで計られてよいのか、明確な目標をどのように設定するべきかは、今後も議論を重ねる必要があるだろう。

おわりに

本論文では、平成21年度前期の上原・王担当の初修中国語のクラスで行った、アンケート調査及び授業中の試みへの検討・考察を行った。

王は、4月時点の学生の中国語選択動機、学習目標を調査し、授業中に実践会話形式の試験を行うことにより学生の学習意欲を向上させることができることを自己評価の結果を基に明らかにした。また、教育文化学部クラスにおいて、ある試みをし、その結果工学部クラスとどのような違いが出たのかを分析した。その結果、学生が望む会話力向上を目指す授業の実現のためには、今よりも小規模のクラスの方が適しているのではないかと提案している。

次に、全クラスで導入している出席カードについて上原担当クラスの学生達の感想を聞いた。出席カードは一定の効果을上げており、今後も継続して利用すべきであろう。また、上原担当クラスでは、学生の予習復習への意識と実態及び学期末の学生の自己評価を調査した。さらに、ペアを組む王クラスでの実践を意識した授業をすることにより、前期中間時と学期末で学生の学習意欲にどのような違いが出たのかを検証した。その結果、教育文化学部では王の実践した試みに連動し、グループでの活動や自主的取り組みを促すゲーム形式を採用したことが意欲向上に効果があったことがわかった。一方工学部では、わかりやすい授業を心がけたことが学習意欲向上に関連があるということがわかった。さらに学生の満足度を調査したところ教育文化学部と工学部では教育文化学部の方が高かった。これは、王の調査結果と同じく、クラスの規模が大いに関係していると思われる。これは、学生自身が考える中国語学習意欲向上のきっかけで最も多かった、実際に中国語に触れてみたい、というものと合わせて考えれば、これから宮崎大学の中国語教育では、より「話す」「聞く」能力を重視するべきではないかという一定の方向を示しているだろう。ただし、これにはまだ多くの課題があり、今後も検討を続けることが必要である。

今後も中国語が日本人教員と中国人教員のペアで行うことができるのか、先行きは不透明であるが、今後連携授業の効果については全クラスに対する調査の上で再検討が必要であろう。

今回の調査は、前期のみという極めて短い時間で行われた。そのため、以上のような問題点が残った。今後、学習意欲向上に関する調査を継続し、一年間にわたる試みの調査結果を発表したい。

付記

なお、本論文作成に当たって行ったアンケートの集計の大部分は、宮崎大学大学院教育学研究科学校教育支援専攻日本語支援教育専修1年の山中鉄齋氏に依頼した。ここに記して感謝したい。

(2009年9月30日受理)

注

- i 宮崎大学教育文学部講師
- ii 宮崎大学非常勤講師
- iii 上原徳子・三好慎一郎「宮崎大学における中国語教育の課題 中国語検定結果を通して」
- iv 清原文代「自律学習のための試み」『TONGXUE』第37号 同学社 2009年2月
- v 注iii 参照。

〈資料1〉

中国語(木曜日) 前期出席カード

学部	学科	学籍番号	出席番号
フリガナ			
名前			

	出欠	小テストの点数	備考
1	4/9		
2	4/16		
3	4/23		
4	4/30		
5	5/7		
6	5/14		
7	5/21		
8	5/28		
9	6/4		
10	6/11		
11	6/18		
12	6/25		
13	7/2		
14	7/9		

注意1

小テスト、プリントなどを忘れた場合は出席点は半分となります。☆遅刻・早退は20分までしか認められません。☆成績評価を受けるためには、大学の規定により75%以上の出席が必須です。3回の遅刻又は早退で1回の欠席とみなされます。☆欠席したときは、教員と急ぎの連絡、その期間の小テスト・レポートは0点となります。特別欠席の場合は、教員と確認して初めて出席と見なされます。

〈資料2〉

セルフチェックシート

今学期の目標→

あなたは今日の授業内容について理解できましたか？(黒板に今日の項目を書きます)

1 まだよくわからない 2 なんとなくできると思う
3 できると思う 4 友達にも教えられると思う

☆今日の反省点、疑問点を右欄にかかわらず書いてください。感想でも構いません。

1	4/9	1	2	3	4	
2	4/16	1	2	3	4	
3	4/23	1	2	3	4	
4	4/30	1	2	3	4	
5	5/7	1	2	3	4	
6	5/14	1	2	3	4	
7	5/21	1	2	3	4	
8	5/28	1	2	3	4	
9	6/4	1	2	3	4	
10	6/11	1	2	3	4	
11	6/18	1	2	3	4	
12	6/25	1	2	3	4	
13	7/2	1	2	3	4	
14	7/9	1	2	3	4	

今学期を振り返って→